

読書メモ2019年6月号

出口治明著『大局観』

(日経ビジネス文庫・2015年)

やなぎわかっひろ
柳沢克央 編

(信州・上田仮説サークル)

2019年6月22日(土), 6月例会用レポート

◇はじめに—

前回までの「読書メモ」と同様、サークルで発表することを目的とすると、読書がはかどるので、今回もこのメモを作成しました。自身のため、記録を残すことが第一目的です。みなさま、よろしく(適当に)おつきあい下さい。今までのものと同様に説明あり、引用あり、要約あり、感想ありで諸々が混交しておりますのでご注意を。(私物)と書き添えてあるもの以外はすべて屋代高校図書室蔵書。

教育実習生に教師の活動のイロハのイから教えています。とても勉強になります。自分自身を見直す良いきっかけになります。なんと、私の学生時代の教育実習記録簿を発掘しました。私がこの世に生まれて初めて渡辺さんの仮説実験授業を見たときの感想が書いてあったのです! 運命的な瞬間の記録です。後ほど紹介します。

◇今月までに読んだ本

◎三宮真智子著『メタ認知で〈学ぶ力〉を高める』(北大路書房・2018年)

○私たちが何か仮説を立てると、その仮説に合う事実ばかり目が向きがちになります。

たとえば、「モーツァルトの音楽を聴くと学習意欲が高まる」という仮説を立てたとします。すると、モーツァルトの音楽を聴いて学習意欲が高まった事例が目につきやすくなります。一方で、モーツァルトの音楽を聴いていても学習意欲が高まらなかった事例には目が向きにくくなります。

迷信や言い伝えを信じてしまう背景にも似たようなところがありますが、最もわかりやすいのは、占いではないでしょうか。「乙女座のあなたには、今日よいことが起こるでしょう」という占いを見てから出かけると、「やっぱり当たっていた！」と感ずることが多いはずで、それは「乙女座の私には、今日、何かいいことが起こる」と期待している（仮説をもっている）ために、そのような期待（仮説）がなければ見過ごしてしまうような些細な出来事にも注意を向けるためです。つまり、注意の向け方に偏りが生じるわけです。

このように、私たちは通常、予想・期待に合致する出来事に目が向きやすくなります。仮説や予想を支持する情報（出来事）に目が向きやすく、仮説や予想に反する情報には目が向きにくいという私たちの認知傾向を、**確認バイアス (confirmation bias)** と呼びます (Wason,1960)。仮説を検証する場合には、自分の判断に確認バイアスがかかっていないかを問い直すことが必要です。

この現象は「自分の立てた仮説を支持したい」「自分の仮説に合わないことは無視しよう」といった意思によって起こるわけではありません。そうした作為がなくとも生じるものなのです。(113 ペ)

○限られた情報から因果関係を考える際に、私たちの推理は短絡的になってしまうことが少なくありません。その典型的な例を、以下に挙げます。

?時間的前後関係と因果関係の混同：たまたまあることの後に何かが起こったために、前者が後者の原因だと思ってしまうことがあります。たとえば、ある会社の業績が急に悪化したことを、最近起こった社長の交代のせいだと思ってしまうのは、その例です。実際には、社長の交代の影響が出るまでには、ある程度の時間がかかりますし、他の要因にも目を向ける必要があるのですが、私たちはつい直前の出来事に目を奪われがちになります。

②相関関係と因果関係の混同：相関は因果の必要条件ではありますが、十分条件ではありません。たとえば、ある中学校で髪の長さと言語の成績に高い相関があったからといって、前者が後者の原因というわけではありません。女子が男子より英語の成績

が良かっただけかもしれません。

③通常の状態への回帰の見落とし：偶然とれた素晴らしい成績は、次は下がる可能性が高いものです。逆に、いつもと違う悲惨な成績は、次は上がるだろうと期待できません。極端な結果は、通常の状態に戻る（回帰する）のですが、ここで教師が、偶然の結果にたいしてほめたり叱ったりすると、「成績は、ほめたら下がり、叱ったら上がる」と考えてしまいかねません。

④循環的因果関係の見落とし：子どもが反抗的だと親はよく叱るようになり、親がよく叱る子どもはさらに反抗的になりがちです。こうした場合、反公的だから叱るのか、叱るから反抗的になるのか、解釈が分かれるところですが、じつは原因と結果が循環しているのです。

このように、私たちは一般に、因果関係を手っ取り早く推理してしまいがちである点に注意が必要です。（117 ペ）

○「アイデアの量と質とは比例する」（タイトルが五七五になっていた）（内容はタイトルだけでわかります）（118 ペ）

○「創造性は特殊な才能」という考えが創造的思考を邪魔する（119 ペ）

○粘り強く考えると、よいアイデアが出る（120 ペ）

○アイデアをどんどん外化することが発想を促す（121 ペ）

○好きで学習していることにご褒美を出されると、逆にやる気がなくなる（129 ペ）

○学習の成果は自分次第であると考えると学習意欲が高まる（130 ペ）

○自分で選べるという感覚がやる気を高める（131 ペ）

○評価ばかりを気にすると学習における新たな挑戦意欲が低下する（132 ペ）

○過度にがんばりすぎると、その後しばらく自制心が働かなくなる（133 ペ）

○自分が学習の主体だと感じれば学習者は能動的になる（134 ペ）

○多少苦手な科目も頻繁に接していると親しみが湧く（135 ペ）

○気分がよいと発想が豊かになる（136 ペ）

○他者に教える（説明する）ことは理解を促進する（142 ペ）

○他者との自由なやりとりは創造的思考を促す（143 ペ）

○討論は複眼的なものの見方を助ける（148 ペ）

○討論でものごとを決める場合、思慮が浅くなることもある（149 ペ）

- 自分で自分を条件づけて学習行動を引き出すことができる (154 ペ)
- 他の人が学ぶ様子を見ることは学習行動を促す (155 ペ)
- 大変そうな学習も少しずつに分ければ楽にできる (156 ペ)
- とりあえず学習を始めればそのまま続けられる (157 ペ)
- 机が散らかっていると作業効率が落ちる (158 ペ)
- 物理的な学習環境が学習効率を左右する (159 ペ)
- 学習計画がうまくいくためには、すべきことの所要時間の可視化が必要(160 ペ)

◎ジョン・ハッティ著・山森光陽訳『教育の効果—メタ分析による学力に影響を与える要因の効果の可視化』(図書文化・2018年)(定価 3,700+税)

要するにこの本は教育の因果関係を論ずるための「エビデンス」＝「証拠」のリスト。今までにわかっている結果について集積してある。「どういう結果が出ているか」ということは明らかにすることができるが、「なぜそのような結果になっているか」については議論が分かれるので、別に検証しなければいけない。

それにしても、客観的な「証拠」をもとに教育を論ずるための基本となる資料が含まれているので、それなりに意義がある。ただ、あまりにもばかばかしいことについてのデータまで含まれているので、笑ってしまう。

そうなのだ。教育の因果関係を客観的に研究しようとする方法は、まだ始まったばかりなのだ。仮説実験授業はとんでもなく進んだ方法であることがいやでもわかってくる。

データはニュージーランドでの研究結果に基づく。

- 過去の学力が高いものほどパフォーマンスが良い。(85 ペ)
- 早期教育にはそれなりの効果がある。(94 ペ)
- 過程の社会経済的な地位が高いものほどパフォーマンスが良い。(100 ペ)
- 母親が子どもの面倒をよく見る家庭の子ほどパフォーマンスが良い。(106 ペ)
- テレビ視聴は学力にはマイナス影響。(107 ペ)
- 小集団学習にはそれなりの効果がある。(129 ペ)
- 学級集団がまとまっている場合ほど教育効果が高い。(131 ペ)
- クラス内の友人関係が良好であるほど教育効果が高い。(134 ペ)
- 教師と学習者との関係が良好であるほど教育効果が高い。(139 ペ)

- 研修を受けた教師ほど教育効果が高い。(141 ペ)
- 目的がハッキリとしている学習者集団ほど教育効果が高い。(149 ペ)
- フィードバックを重視した方が良い。(170 ペ) (181 ペ)
- テストを頻繁にやればいいのかというと、そういうものでもない。(177 ペ)
- 繰り返して同じ内容を学習した方が効果が上がる。(187 ペ)
- メタ認知＝「自分の思考について考えることを意識させる指導」を意識させる方が効果が上がる。(191 ペ)
- レポート執筆前にアウトライン(あらすじ)を書かせると良い。(193 ペ)
- 学習者に自己管理させても効果はハッキリしない。(197 ペ)
- 個別指導をすれば効果が高まるというものでもない。(202 ペ)
- 生徒に意図的に先生役をさせることで学習効果はとても高まる。(209 ペ)
- 学校全体として一つの課題に取り組んでも効果はそれほど高まらない。(224 ペ)
- 学習障害児に個別に指導すると効果がとても高まる。(227 ペ)
- TTの効果はハッキリしない。(229 ペ)
- 宿題を出すことによる効果はハッキリしない。(249 ペ)

「教育学についての本格的な研究書」に堂々と書いてある内容であっても、この程度のことであることに開いた口がふさがらない。あまりの馬鹿馬鹿しさに「あくび指南」という落語を思い出してしまった。これで紙を使うのかよ？

われわれの仕事は尽きないようである。それはそれで、やりがいのあることである。「まえがき」に「教育関係者は自信の影響力を心得よ」(11 ペ)とある。「はい、わかりました。でも、それって当たり前じゃないの?」。徹頭徹尾、非常に凝ったジョークのような本である。

◎ガリ本『板倉式発想法と組織論 1996』(マタギ書房)(私物)

イタクラ式発想法の極意が明確に記されているすばらしいガリ本。残部僅少のところ、版元の伊藤顕治(福島)さんをお願いして、数冊だけ頒けてもらった。サークル付近で未読の方にはお薦めします。行間から1996年当時の熱気が伝わってくる。内容はとても刺激的で、今でも古くなっていない。板倉さんの話が聞き手にどんどん吸収されていく様子が臨場感たっぷりに伝わってくる。エキサイティング。ガリ本というメディアの性質ゆえに引用は差し控えます。ただ、「イタクラ式発想法の極意」が確

かに明確に記されていることは重ねて記しておく。在庫限り。吾こそはと思われる方はすぐに柳沢までコンタクトを。

◎田中陵二・松本英之共著『実験室の笑える？笑えない！事故実例集』（講談社・2001年）

フェイスブックでこの本の存在を教えてもらい、amazon で速攻購入してみた。大学の有機化学研究室レベルの自己実例記録集。明るく笑い飛ばす雰囲気があって、平易で読みやすい。だが、小中高の化学実験レベルには直接役立つことは多くない。（読みこなし）＝（類推）によって役立つ教訓が引き出せるタイプの本。私のような問題意識を持っている者にとって、手元に置いておく価値があるだろう。

「まえがき」より抜き書きしてみる。

＊

有機化学実験には、失敗やアクシデントがつきものです。そのほとんどがささいなものですが、時には重大な事故も起こります。ところが、失敗例や事故例は、（特に大学においては）人に言えない「恥」として、闇から闇へ葬り去られてしまうことが多く、そのために全く同じ失敗を繰り返す人が後を絶ちません。実験室における失敗談が口伝として残る寿命は、長くて十年程度ではないでしょうか。しかも、その内容は、語り継がれるうちに、詳細な部分がぼやけてきて、どのような原因であったのかも不透明化してしまいます。これらの理由から失敗談は研究者の「酒の肴」として語られることはあっても、公開されることはほとんどありませんでした。

この本は、有機化学を志す学生たち、特に、卒業研究を始める学部生から大学院生を対象として、誤った実験法によって事故を起こさないようにと、逆説的に「失敗を糧にして」正しい実験法を導き出そうと企画したものです。そのため、一般的な「実験の手引き」書としての骨組みを持ってはいません。本書は、著者の経験した失敗やアクシデントの具体例、ネットワーク上の掲示板(BBS)で集めた事故例、およびさまざまな研究者からうかがった経験談をまとめたものです。過去の研究者のささいな、あるいは重大な失敗を教訓として、本書を有機実験の安全指針として活用してもらえらるならば幸いです。（以下略）

＊

本書は大学レベルの化学実験での失敗談が山盛りに詰め込まれていて、大変興味深

い。興味を持った高校生が読み進めておけば、大学へ入ったときに役立つことも多いと思った。

◎大堀精一著『小論文・書き方と考え方』（講談社選書メチエ・2018年）

学研で長年、大学受験小論文のスペシャリストとして指導してきた経験を活かしての上梓。たまたま屋代高校3年生の学年会講演会で来校したところにお願ひし、あらかじめ用意しておいた本にサインしてもらった。

大堀氏は1948年生まれ。推測だが学生運動の経験もあるものと思われる。本人曰く「吉本隆明氏から多大な影響を受けた」とのこと。のたうつように行きつ戻りつして論理を進めていく文体にもその影響がうかがわれる。

◎出口治明著『知的生産術』（日本実業出版社・2019年）

素晴らしい本。来月以降に紹介する。読みやすい。

◎出口治明著『大局観』（日経ビジネス文庫・2015年）

気になった部分を引用して紹介する。明快な語り口が素晴らしい。読みやすい。

*

いま、そしてこれからの日本を考えると、日本における戦後の経済発展を振り返り、大局的に分析する作業は欠かせないと思います。年配の指導者たちにとっては、戦後の復興こそが最大の「成功体験」です。これからの日本をつくっていく若い世代は、彼らがよりどころにしている成功体験の本質について、今一度、冷静に考えてみる必要があります。

日本人は決して特殊ではないと繰り返し言ってきましたが、「最終的に勝利するために何をするか」といった本質的・戦略的な問題を徹底的に考え抜くという訓練をあまり受けていないのではないかと感じることはあります。これは民族性ではなく、思考法の訓練の問題です。（180ペ）

*

英国の兵士は第二次世界大戦のときに、「負けて捕虜になった場合の対応」について訓練を受けていたが、日本兵は訓練を受けていなかった。（要旨）（183ペ）

◎堀栄三著『大本営参謀の情報戦記』（文春文庫・1996年）

気になった部分を次に引用。

＊

昭和二十年の敗戦まで、軍は日本最大の組織であった。しかも最も情報を必要とする組織であった。その組織がいかなる情報の収集・分析処理・管理のノウハウを備えていたのか、あるいはいなかったのか？ いかなる欠陥をもっていたのか？——その実態を体験的に述べることは、日本の組織が内在的にもちやすい情報に関する問題点を類推（アナロジー）させることにも役立つのではなからうか。

物語の大部分は、自ずから太平洋戦争の戦場が主体であるが、企業でも、政治でも、社会生活の中でも、情報が極めて重要な役割を占めている今日、それぞれの分野や組織で情報に関係する人びとにとって、それなりの示唆を与えるものではないかと思っている。

本文中では再々、戦略・戦術・戦場という昔の軍隊用語が出てくるが、もし企業の方々が読まれる場合には、戦略は企業の経営方針、戦場は職場や営業の活動、戦場は市場（マーケット）、戦場の考察は市場調査とでも置き換えて読んでくだされば公人である。（まえがき、6ページ）

＊

結局、日本の陸海軍情報は不十分であったことが露呈したが、その理由の主なものは

- (1) 軍部の指導者は、ドイツが勝つと断定し、連合国の生産力、士気、弱点に関する見積もりを不当に過小評価してしまった。（注、国力判断の誤り）
- (2) 不運な戦況、特に航空偵察の失敗は、もっとも確度の高い大量の情報を逃す結果となった。（注、制空権の喪失）
- (3) 陸海軍間の円滑な連絡が欠けて、せつかく情報を入手しても、それを役立てることができなかった。（注、組織の不統一）
- (4) 情報関係のポストに人材を得なかった。このことは、情報に含まれている重大な背後事情を見抜く力の不足となって現われ、情報任務が日本軍では第二次的任務に過ぎない結果となって現れた。（注、作戦第一、情報軽視）
- (5) 日本軍の精神主義が情報活動を阻害する作用をした。軍の立案者たちは、いず

れも神がかり的な日本不滅論を繰り返して声明し、戦争を効果的に行うために最も必要な諸準備を蔑ろにして、ただ攻撃あるのみを過大に強調した。その結果、彼らは敵に関する情報に盲目になってしまった。(注、精神主義の誇張)と結んで、これが米軍の日本軍の情報活動に対する総評点であった。

あまりにも的を射た指摘に、ただ脱帽あるのみである。以上の五項目は、戦後四十年経った現在でも、まだ大きな教訓的示唆を与えている。以下略。(328 ぺ)

*

長くて大きな「兎の耳」こそ、欠くべからざる最高の「戦力」である。(339 ぺ)

*

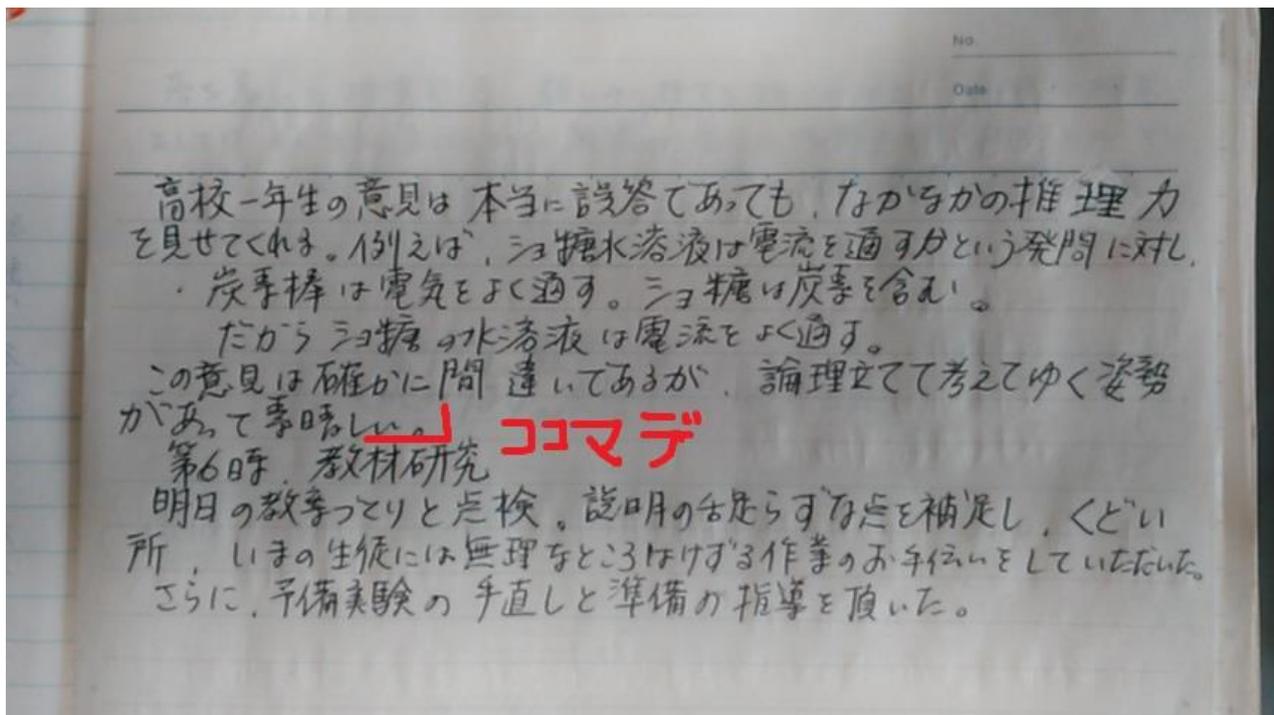
本文は機会を改めて読むことにする。やはり「失敗の経験をその後に活かす」という姿勢が何事にも大切であると言える。情報の軽視は命取りになりかねない。さりとて、情報過多でも意味がない。必要なのは中庸のバランスであろう。そして「自己の客観的認識＝離見の見」であろう。世阿弥の真剣勝負への対応法はやっぱりすごいな～。まだまだ世阿弥への興味が尽きない。

◇まとめ・つぶやきなど

○「生徒の学校不適応」が問題であるならば、「教師と学校の現代社会不適応」の問題のほうが、大きな問題なのではないか。なぜなら、指導のプロセスや手続きの序列において教師や学校は生徒の上位者に位置づけられるからである。ロシアのコトワザ「魚は頭から腐る」。

○これからの時代の学校を考えると、次の三つをきちんと学んでおくことは必須と思われる。①経営学、②マーケティング、③企業における人材育成法。〔以上、5月30日(木) 16:30〕

○ひょんなことから教育実習記録簿が出てきた。なかなか面白いので紹介します。母校である上田高校で教育実習を受けていた柳沢は1988年6月20日(月)⑤時間目に生まれて初めて仮説実験授業を見た。授業者は上田仮説サークルの渡辺規夫先生。



学生時代の柳沢は渡辺さんの授業の時間に「アタマがいいから間違える」生徒たちの姿を目の当たりにして、論理立てて考えている生徒たちの姿勢に感動して、仮説実験授業に興味を持ち始めたことが、明瞭に記録されている。以来、とても素晴らしい数々の出会いが続き、今日を迎えることができている。本当にありがたいことです。

[5月30日(木)教育実習期間の後半に]

○教育実習を終えた。事前の打ち合わせで、私の担当したXさんに「松竹梅どのコースが良いですか？」と訊いたら「松でお願いします」と言われたので、本当に気合いを入れて実習指導をした。Xさんは教える前から素晴らしい状態であった。悔いのない、心に素晴らしい余韻が残る教育実習ができた。[6月3日(月)]

○「教師は歩く教科書である」。この文には少なくとも二つの意味がある。「教師は教科書の内容を体現した素晴らしい成功者の見本である」および「教師は教科書の内容しか身につけられなかったが、そのことを特に負い目に思わずに、堂々とその事だけで喰っていけることを恥じない度胸を身につけた、とても不思議な人間の見本である」。

[6月6日(木) 10:47]

○若い人間はものを知らないがゆえの○○,年取った人間は知っているがゆえの○○,前者に必要なのはラーニング,後者に必要なのはアンラーニング。理想は両者の間にある。これをソクラテスは「無知の知」と呼んだ。このことはクルマの運転中に思いついた。[6月21日(金) 13:10]

○私が面接官だったら是非とも応募者にしてみたい質問。「あなたは失敗をしたことがありますか」。これに対する模範回答「はい、山ほどしました。数え切れないくらい失敗しましたが、全部覚えています（またはぜんぶ記録にとってあります）」。

このことは昨日、教育センターで課題研究（探究活動）の指導法を学んでから、いろいろ考えた結果、今朝の授業中に思いついた。私の場合、生徒たちが一生懸命勉強している姿を見ているときや、陸上などのスポーツの試合で懸命に競技している様子を見たりするとき、学校内では試験監督をしているときなどに「いいこと」を思いつく率が高まる、という経験則を持っている。〔6月21日（金）13:20〕

◆来月以降に読む予定の本

◎野村克也著『野村ノート』（小学館・2005年）（私物）

◎半藤一利・出口治明共著『明治維新とは何だったのか』（祥伝社・2018年）（私物）

◎牧衷著『寛容思想の成立と発展』（上田仮説出版・2018年7月30日刊）（私物ガリ本）

◎佐藤義典著『図解・実践マーケティング戦略』（日本能率協会マネジメントセンター・2005年）（私物）

◎板倉聖宣著『増補版・模倣と創造』（仮説社・1987年）（私物）

◎マックス・ウェーバー著・中山元訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（日経BPクラシックス・2010年）（私物）

◎牧野雅彦著『新書で名著をモノにする「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」』（光文社新書・2011年）（私物）

◎廣松渉・加藤尚武編訳『ヘーゲル・セレクション』（平凡社ライブラリー・2017年）（私物）



◎文藝別冊『KAWADE 夢ムック・立川談志』（河出書房新社・2013年）（私物）

「最後までお読みいただきありがとうございます」〔2019年6月21日（金）18:00，来週月曜・火曜と理科金沢研修旅行，特別講演の講師は仮説実験授業研究会の重鎮の一人，四ヶ浦弘さん。楽しみです〕